〔駒沢女子短期大学　研究紀要　第30号　P.105～113　1997〕

唯識説におけるniyataの範囲（1）

千　葉　公　慈

A field of niyata in Vijñaptimātravāda (1)

Kōji CHIBA

1．問題の所在

「すべての存在は、ただ認識のみである」とする主張する瑜伽行唯識学派（Vijñaptimātravādin）にとって、行をおし進めていく上での精神的根拠となる「限定された対象についてはたらく心作用（別境の心所：viśeṣe niyatatva）」とは、果たして如何なるものであろうか。筆者は以前、「信（śraddhā）」と「信解（adhimukuti）」の語義を比較的に考察することによって、様々な信仰の異相を探ろうとしたが、今ひとつ信解の対象となる、その限定された範囲については明確ではなかったと思う[1]。従って小論では、改めて「別境」と言われる限定された心作用の特質を探ることにより、唯識学派の信仰の対象を、より具体的に浮き彫りにすることを小論の目的としたい。

まず唯識説の定める一切心所のうち、(vi) niyataの位置を概観するため、世親（Vasubandhu）造『唯識三十頌（Triṁśikā-vijñapti-kārikā）』における六識をともなう心作用（心所）の分類を確認する。

sarvatragair vinayataiḥ kuśalaiś caitasair asau.
saṁprayukutā tathā kleśair upakleśais trivedanā[2]. (K-9 abcd)

それは、①〔あらゆる対象に〕行きわたるもの（遍行の心所）と、②限定されたもの（別境の心所）と、③善なるもの（善の心所）と、および④煩悩（煩悩の心所）と、⑤付随的煩悩（随煩悩の心所）との〔五群の〕心作用と、それに三つの感受（楽・苦・不楽不苦の三受）とを伴う。

ただし『成唯識論』では、最後の⑤付随煩悩のうち、一部を善・悪のいずれにも定まらないものとして別途に⑥「不定の心所」として設定しているが[3]、およそ初期の唯識説においては以上の5種と考えてよい。

このうち、瑜伽師（Yogācāra）と言われる者達が、ヨーガ（Yoga）を修する際に支えとする心作用とは、あらゆる対象に向かう性格のものではなく、あるいは日常生活に見出だされるような感覚的なはたらきでもない。つまり、より知的で宗教的な欲望に裏付けられた心作用でなければならない[4]。これこそ②「限定されたもの」であり、そこには以下の5種が述べられる。

chandâdhimokṣasmṛtayaḥ saha. (K-10 b)
samādhidhībhyāṁ niyatāḥ. (K-10 c) [5]

限定された〔対象についてはたらいている心所〕とは、①願求（chanda）と、②信解（adhimukuti）と、③憶念（smṛti）と、④三昧（samādhi）と、⑤叡知（dhī）とに共通〔な心所〕である。

2．特に「信解」について

先の引用における5種の心作用について、今後はその各々を厳密に定義してゆくならば、自ずとかの宗教的欲求として特別に限定された心理的緒存在の範囲が明らかになると思われるが、就中、注目に価するのが②「信解（adhimukuti）」の定義である。というもの、今ひとつの初期唯識文献を代表する、開祖マイトレーヤ（Maitreyanātha）の作と伝えられる『大乗荘厳経論頌』（Mahāyānasūtrâlaṁkāranāmakārikā）と、及びその注釈書『大乗荘厳経論』

(Mahāyānasūtrâlaṁkāravyākyā) において、特別のこの「信解」をテーマとして章が設定されており、厳密な考察がなされているからである[6]。

例えば「信解の種々となる特質(差別相、prabhedalakṣaṇa) の弁別」の箇所では、以下のように説明されるのだが、果たして如何に解釈すれば適切だろうか。

mos pa skyes kyang bdud dang mu stegs la sogs pas drangs nas mos pa gyur na ni 'phrog pa'i mos pa zhes bya ste.
'di ni mos pa chung ngu'o. skabs su dad pa yang 'gyung la ma dad pa yang 'byung ba la ni mos pa yang enam par 'dres pa'i mos pa zhes bya ste. 'di ni mos pa 'bring ngo. dad pa 'ba' zhing rgyun tu 'byung gi ma dad pa ni mi byung ba'i mos pa la ni mi mthun phyogs ma 'dres pa'i mos pa zhes bya ste. de ni mos pa chen po'o.[7]

信解 (mos pa) が生じても、悪魔や異端者等によって導かれて信解することになるのならば、〔それは〕取り去られるべき (hāryā) 信解と言われるのであって、この信解は劣ったもの (下品) である。場合によって信(dad pa)も生じるけれども、不信(ma dad pa) もまた生じることに関しては、信もまた混合した (vyavakīrṇā) 信解と言われるのであって、この信解は中庸のもの (中品) である。唯一の信は、常に生じるけれども、不信なるものは生じないといった信解に関しては、所対治 (障) と混合しない信解と言われるのであって、その信解は優れたもの (上品) である。

つまり先の『唯識三十頌』によれば、信 (śraddhā) はあくまでも③「善なるもの」という心作用の筆頭に属し、不善と相交える要素が無かったのに対して、ここでは「唯一の信」を上品とはするものの、段階的な種類の内に、ある程度の範囲を認めるものとなっている。特に中品においては、「信」と「不信」の双方を「混合した信解」としてその範疇としていることに関しては、明らかにその寛容的性格が見られる。それでは今一度、『唯識三十頌』にもどり、「信解」の定義を確認しておく。

adhimokṣo niścite vastuni tathâivâvadhāraṇaṁ niścitagrahaṇam aniścitapratiṣedhârthaṁ yuktita āptôpadeśato vā yadvastu asaṁdigdhaṁ tanniścitaṁ yenâivâkāreṇa tanniścitaṁ anityaduḥkhâdyākāreṇa tenâivâkāreṇa tasya vastunaś cetasy abhiveśanam evam etannânyathêty avadhāraṇam adhimokṣaḥ. sa câsamhāryatādānakarmakaḥ. adhimuktipradhāno hi svasiddhāntāt parapravādhibhir apahartuṁ na śakyate.[8]

信解とは、既に確定された存在に対して、まさにその通りであると決定することである。「既に確定された」とは、未だ確定されていないものを否定する意味である。論理及び聖教にもとづいて、凡そ何であれ疑問の余地のなくなった存在であれば、それが「既に確定された〔存在〕」である。無情とか苦などというような様相によってそれが確定された場合、それらの諸存在は、まさしくその同じ様相をもっているというように心に定着させること、《これはこのようであって、それ以外ではない》というように定着すること、それが信解である。そしてそれ (信解) は、〔如何にしても〕破壊できないということをもた昨日をもつものである。何故ならば信解を主要とするものであれば、反対論者たちによって自身の教義から引き離されることがあり得ないからである。

即ち、「未だ確定されていない存在」に対しては、徹底的にそれらを排除し、「これはこのようであって、それ以外ではない」と確信して、どのようにしても破壊されないあり方に導くという。而して「evam etannānyathety avadhāranam」とは、如何なる意味であろうか。「avadhāranam」とは接頭辞ava-(遠離、下方のPrev.) にdhārana (保持している、維持している) という形容詞が結びついたものであるが、この語義を直訳すれば「他のものからは切り離された、あることがらを所有していること」という意であり、それは「陀羅尼」という言葉にも共通する、ある種何らかのものを保持した状態を形容するものであって、言語的には「信」の行為そのものの動的要素を意味するものではないことが理解される。

3.『大乗経荘厳広註』「信解品」試訳

前節に見られた通り、瑜伽行という実践上の信仰

のあり方において、「信解」のある種の許容範囲は、信を保持した心理的状態に起因しているものと思われる。その点についてより明確にするために、以下、小論に於いては『大乗荘厳経論』に対する無性（Asvabhāva：約450～530）の註釈といわれる『大乗荘厳経論広註（Mahāyānasūtrālaṁkāra-tīkā）』（註６：E）第10章を掲げて和訳を施し、次回の安慧釈（註６：D）の考察への足掛かりとしたい。

《凡　例》

1．本文は、MSAT（註６：E）、X（adhimukutyadhikāra）の訳出である。
2．「　」内は、MSAKおよびSABhに認められる箇所である。
3．〔　〕内は、文意を明確にするために補った部分である。
4．（　）内の梵語は、Lévi本を参考にして補ったもの、および蔵訳から還梵したものである。

《試　訳》

【第１節】信解品の設定の意義

〔第10章「菩提品」に続き〕更にまた、諸々の菩薩たちによって何が述べられるべきか（prayoktavya）ということ、即ち自利・利他ということ（二利品）から始まって、菩提の〔主題〕までの第７の章[9]、それを説明し終えたのである。今は凡そ菩薩といった者たちは、「どのようにして修するのか（如是学：yathā śikṣante）」を示すのである。

「どのように修するのか」と言わば、信解（第10章）や法の尋求（第11章）等の次第によって〔修されるの〕である。

【第２節】信解の特質の分類

どのように蘊義なのか、ということに関して、色とは如何なるものか〔と言えば〕即ち、①過去〔に生ずるもの〕、②未来、現在に生ずるもの、③〔自己の〕内〔なる能取として〕の、④〔自己の〕外〔なるものを対象とすることによる所取〕の、⑤〔他者から取得した〕粗なるもの、⑥〔自己から生じた〕細なるもの、⑦〔転倒した〕劣ったもの、⑧〔迷乱のない〕優秀なもの、⑨親近なるものの場合、凡そ何であれ、そこに留まっているもの（現前のもの）、⑩遠きものの場合、凡そ何であれ、そこに留まっているもの（現在でないもの）と言われるこの次第によって、色蘊等の種別を示すように、信解もまた諸々の経典[10]の中で、「過去（atīta）」等の差別（prabheda）が示されているのである。

〔これらの分類のうち〕④〔「外」と言われる〕所取とは、下界〔の信解〕であるが、一方の、③〔「内」と言われる〕凡そあるものに対してそれを対象とすることとしての信解である、と言われるのは、信解とは心所の法であって、何れかの性質としての、かの大乗の法を対象とする彼の生ずることの性質が、能取性として示されたのである。何れかの性質、それ自体としての過去における享受（āsvāda）と、随喜と、未来における称賛等を対象とする彼の性質は、所取性として示されるのである。更にまた、心自体があらゆる点で、〔所取・能取という〕二つの様相有するものとして働くことが、２種類の信解として説かれたのである。⑦「転倒した信解だからである」と述べられることについて言えば、例えば声聞乗の者たちが、声聞乗を大なるものとして単に修習することのみによって、仏たることが獲得されるだろう、といった信解のようなものである。〔更に〕密意を有する意味（ābhiprāyikârtha）に対して言葉通りに信解するならば、転倒した信解なので迷乱（bhrāntika）と言われるのである。⑨「現前〔の信解〕」とは親近なるものであって、「縁が近くにあるものだからである」とは、善良なる朋友などといった縁が近くにあるならば、そこ（善知識）からそれ（勝義の法）を聞いた直後に信解が生ずるのである。

〔また別なる分類として第３偈に以下の13種類の信解が説かれる。〕

(a)「取り去られるべきもの（hāryā）」と、(b)〔信と不信との〕「混合」と、(c)「所対治（障礙）と混合しないもの」と言われる信解を分類した、この〔前三者〕は、経典の中で、「劣なるもの」と、「中庸なるもの」と、「大なるもの」と〔順次解説される。更に〕、(d)「下劣なるもの」と、(e)「広大なるもの」と、(f)「障礙」と、(g)「無障礙」と、(h)「精勤」と、(i)「不精勤」と、(j)「積集」と、(k)「積集なきこと」と、(l)「説示」と、(m)「遠くに働くこと」の各別によって論じられたことが、即ち〔最初の分類とは〕別〔の13種の信解〕である。

〔この中で〕(b)「混合」とは「中庸なものである」と述べられることについて言えば、時によっては信解し、時によっては信解しないものであって、信解

無きと信解の混合したために「混合」と言われるのである。信解無き〔信解〕とは、〔菩提への〕意向の無いこと（a-chanda）と懈怠（kausīdya）等〔の意味〕である。

(f)「障礙」〔の信解〕とは、殊勝なる邁進（勝進：viśeṣa-gamana）において、障礙を伴うことである、と述べられることについて言えば、信解を包摂し尽くしていると雖も、劣悪なる行為に結びついているために、殊勝を得ることは出来ないのであり、それ故に、「障礙」と言われるのである。更にまた誰によって〔結びつく〕のかと言えば、後世の者が〔将来には〕信解するであろう正法によって悪事を滅する行為をなすために、〔現在は〕障礙を伴うと言われるのである。

(h)〔本文における「精勤」の箇所について〕「常に」と述べられるのは、常に間断の無いことである。〔しかし〕常にではあるけれども、ある者は恐るべき想念を起こすことが無いために、それを授記するが故に、「恭敬を為して」と述べて説明するのである。

(j)「積集とは、了解に相応するものである」と述べられるのは、福徳と知慧の〔二〕資糧を第一阿僧祇劫にわたって、ただ積集することのみを手段とするのである。

【第3節】信解の障礙

〔本文の第4偈における③④「動揺せる精勤」の箇所について〕「所取および能取することにおいては、瑜伽行が錯乱する」と述べられることについて言えば、初めての入門者における所取および能取する物事は、先に説いたやり方として、真実（諦：satya）なるあり方が安立されるのである。すべてにおいて所取と能取とに通達することになれば、〔正に〕その時に「瑜伽行が錯乱する」と言われるのである。一体何が錯乱するのか、と言えば、瑜伽（yoga）の行〔が錯乱するの〕である。何故ならば、無分別智としての〔行では〕所取と能取とから遠離しているのに対して、〔無分別智には至っていない錯乱した行では〕両者（所取と能取）に執着するからである。

〔本文の第4偈における⑥「善の無力」の箇所について〕「自己自身の信解に関しては、善根が無力である」と述べられることについて言えば、信（śraddhā）や無貪等といった諸々の善根が、しばしば熟達されない〔状態に〕なることである。〔反対に〕迷乱の信解にとっての障礙は考えられないのであって、何故ならば、それ（迷乱の信解）自体が障礙であることに基づくからである。〔したがって〕ただ善良なる側面の信解のみから障礙を考慮すべきであるから、故に現前していない障礙もまた考えられないのである。何故ならば、それ自体が障礙を自性とするからである。

〔本文の第5偈における⑬「寂静のみであるという増上慢」の箇所について〕「ただ寂静のみによって顕現するという傲慢」と述べられることについて言えば、観察（正見）に関して尚一層の精進（勇猛加行）を為さないことである。〔したがって〕寂静と観察とが平等に働く時には、両者の合一（yuganaddha）なる道が獲得されるから、信解は障礙無きものとなるだろう。

〔本文の第6偈における(f)「有障」の箇所について〕「無障礙〔の信解〕においては障礙である」と述べられることについて言えば、懈怠等の諸々の所対治によって、勝義と結びつくものとされて、尚一層殊勝なるものに邁進することにはならないだろう。

【第4節】信解の功徳

〔本文の第7偈における①「大なる福徳」の箇所について〕「已生が現在時に生じる〔信解〕とは大なる福徳である」と述べられることについて言えば、先（第2偈）にて信解の已生は、過去と現在に生じる2種類のあり方が説かれた〔ものに結びつくのである〕。その〔2種類の〕うち、現在に生じるものの功徳は、「大なる功徳」である。

②過去〔の信解〕とは、執着等の信解がしばしば修習（熟練）されることにおいて、「後悔は無い」という功徳である。何故ならば、意（こころ）に後悔の念が起こらないからである。

③能取と所取の〔信解〕とは、「大なる喜楽」である。「何故ならば、三昧（samādhi）を伴うからである」と述べられることについて言えば、所取と能取をすることになるであろう彼の信解に対しては執着しないけれども、しかし所取と能取そのものを排除せしめるその時に、執着が捨てられることによって三昧が獲得されるのである。

〔本文の第8偈における⑩「利他を得る最勝」の箇所について〕「広大なる〔信解〕とは利他の獲得という最勝なるもの」と述べられることについて言えば、仏たること（仏性：sangs rgyas nyid）が得られるという趣旨なのである。

⑪「功徳は速やかなる神通そのものである」と述べられていることについて言えば、「速やかなる神通そのもの」とは利根（tīkṣṇa-indriya）に他ならない〔ことである〕。即ち開かれた知識（略開智：udghaṭita-jña）のために、速やかなる法として遍智（parijñā）するのである。

〔本文の第8偈において〕「世間の禅定を伴った者たちにとっての〔信解〕とは、亀の如くである」と述べられることについて言えば、一切法の個別相と一般相を通達するために、信解は〔亀の手足が縮まるように〕畏縮する（'khumpa）と言われている。更にまた(a)禅定と、三昧と、等至とが獲得されることだけのために、また(b)そのことのみによって自ら事足れりとするために、また(c)真実が理解されていないために、また(d)功徳としての殊勝が獲得されないために〔信解が〕畏縮するのである。

「自利を伴った諸々の声聞たちによる〔信解〕は、人無我を理解しているから、〔また〕一切法の一般〔相〕のあり方が知られている〔から、〕その2つ〔の通達〕のために、彼ら（声聞たち）にとっての信解は、亀の如きものではないのである。しかしながら、自利のみに専念するために、生死〔の法〕に恐れて厭離するのである。即ち〔王様が領地に住することとは対照的に〕まるで召使いのように恐れおののいた身体が、〔あちらこちらに〕遊行することによって、そのために「召使いと等しい」と言われるのである。」

「この〔譬喩の〕意味を他者に明示して」と述べられることについて言えば、「恰も犬は常に飢えて苦しむから、満足することを知らない」と言われる、この〔第9の〕偈頌は、最初の〔亀や召使いとして譬えられた〕偈頌とは別なる〔有欲者を譬えるの〕である。これについて示して、その直後に3つ〔の譬喩〕によって、大乗に関する信解が開示されるのである。

〔本文の第10偈において〕「かの大乗についての〔信解〕は、その最勝なる道理を如実に理解して」と〔述べられるの〕は、この場合、説示されたことによって、その中で〈それ（大乗の信解）そのものを追及する云々〉と述べて、大乗における信解を開示するのである。

【第5節】信解の福徳の殊勝

〔本文の第12偈と第13偈において〕「自分自身が食べる〔というに人は、福徳が生じることが〕ない」と述べられることについて言えば、「自利を主題として」と述べられる言葉に結びつくのである。まず、凡そ何であれ、憐愍（同情）の対象と、傲慢と、および住くことなどを目的として〔自分が〕食する彼の食物は、決して福徳ではないということになるだろう。〔あるいは〕凡そ何であれ、授記されたものとして〔自分が〕食する彼の食物は、福徳でもなく、〔且つ〕福徳ではないということでもないのである。〔何故ならば〕傲慢などを目的としては食さないかも知れないが、例えば、荷車を押し進めるために、車輪の主軸を〔油で〕塗るといった様なあり方と同様に、「身体を維持することによって善分（dge ba'i phogs）を獲得し、沙門のあり方において果が得られるだろう」と言って、〔自分の〕身体が維持されるべきことを目的として食する彼の食物は、〔狭義には〕福徳となるであろうけれども、大なる〔信解の〕福徳が生じることにはならないのである。同様に〔自利を所依とした〕声聞乗の法における信解によってもまた〔以下の如くである。即ち〕、利他の所依（āśraya）としての大乗の法が示された〔ことのうち〕、ひとつとして〔この〕偈頌を聞いたり、理解することなどによって、〔他者に〕利益を与えることが、それぞれの大乗経典の中で〔説かれた〕様に、凡そ何であれ生起したもの（大乗法の福徳）と等しい大なる福徳が、〔声聞乗の者たちに〕生じることはないのである。

【第6節】信解の果の獲得

〔本文の第14偈において〕「かくの如く大なる聖法（'phags pa chen po'i chos）とは広大となるが」と述べられていることの中で、「広大となる」とは大乗のことである。何故ならば、百千という多くの経典（śata-sāhasrikâdy-aneka-sūtrôpadeśa）が説示されているからである。

「①何処において、②誰が、③如何なる信解によって、④何れの果が能く獲得される（parigraha）のか」と述べられていることの中で、「①何処において」とは、大乗の広大なる教えにおいて〔という意味〕である。②「誰が」と言われるのは、菩薩、即ち智を有している者〔という意味〕である。③「如何なる信解〔によって〕」と言われるのは、衰滅することの無い（a-parihāṇiya）広大なる信解によって〔という意味〕であり、「大なる信解」と述べられた、凡そその所説である。④「何れの果が能く獲得されるの

か」と述べられることについて言えば、(a)「広大なる福徳の増長（'phel ba)」を初めとして、〔(b)「その同じき信解の増長」と、および(c)「信解を因とする無比なる功徳の大我性、即ち仏たること」という先の偈頌で説かれた〕3種類が、能く獲得されるのである。

《蔵　文》

[Der.ed 75b[7]] yang na byang chub sems dpa' dag gis gang la[11] bslab par bya ba rang dang gzhan gyi don nas bzung ste. byang chub kyi bar gzhi bdun po de ni bshad zin to. da ni ji ltar te byang chub sems dpa[1] rnams rnam pa gang gis slob pa de ston to. [Der.ed 76a[1]] ji ltar slob ce na mos pa dang chos yongs [Pek.ed 154-2-1] su tshol ba la sogs pa'i rim gyis so. ji ltar phung po'i don las brtsams te gzugs gang ci yang rung 'das pa 'm. ma 'ongs pa 'm. da ltar byung pa 'm. nang gi 'm. phi' i 'm. rags pa 'm. phra ba 'm. ngan pa 'm. gya nom pa 'm. nye ba na 'dug pa gang yin pa 'm. thag ring po na 'dug pa gang yin pa zhes bya ba'i rim pa ' dis gzugs kyi phung po la sogs pa'i rab tu dbye pa bstan pa de bzhin du mos pa yang mdo dag las ' das pa la sogs pa'i bye brag gis dbye ba bstan to. gzung bar gyur ba ni phyi rol gyi ste gang la dmigs pa nyid du mos pa'o zhes bya ba ni mos pa ni sems las byung ba'i chos yin te. gang gi tshe de theg pa chen po'i chos la dmigs te shye ba de'i tshe ni 'dzin pa nyid du bstan to. gang gi tshe de nyid 'das pa la ro myang ba 'm. rjes su yi rang ba 'm. ma 'ongs pa mngon bar dga' ba la sogs par dmigs pa de'i tshe ni gzung ba nyid du bstan to. yan na sems nyid thams cad gnyis kyi rnam pa can du ' jug pas mos pa rnam pa gnyis su brjod do. log par mos pa'i phir ro zhes bya ba ni dper na nyan thos kyis theg pa cher bsgom pa kho nas sangs rgyas nyid thob par 'gyur ro zhes bya bar mos pa lta bu ste. dgongs pa can kyi don la sgra ji bzhin du mos na log par mos pa'i phir nor pa zhes bya'o. mngon sum pa ni[12] nye ba ste. rkyen nye ba'i phir ro zhes bya ba ni dge ba'i bshes gnyen la sogs pa rkyen nye na de las de thos ma thag tu mos pa skye ba' o. 'phrogs dang 'dres dang mi mthun phyogs ma ' dres zhes bya ba la mos pa'i rab tu dbye ba 'di ni mdo las chung du dang 'bring dang chen po dang dman pa dan grgya chen po dang bsgribs pa dang ma bsgribs pa dang brtson pa dang ma[13] brtson pa dang bsags pa dang ma bsags pa dang bstan pa dang ring du zhugs pa'i bye brag gis brjod pa ste gzhan yin no. [Pek.ed 154-3-1] 'dres pa ni 'bring po'o zhes bya ba ni res 'ga' mos[14] res 'ga' mi mos pa ste. ma mos pa dang[15] mos pa 'dre[16] pa'i [Der. ed 76 b[1]] phir 'dres pa zhes bya'o. ma mos pa ni 'dun pa med pa dang le lo la sogs pa'o. bsgribs pa ni khyad par du bgro bar bya ba la sgrib pa dang bcas pa'o zhes bya ba ni mos pa yod du zin kyang bya ba ngan pas 'brel[17] pas khyad par mi 'zob ste. de'i phyir sgrib pa zhes bya'o. yang na gang gis na tshe phyi la ma[18] mos par 'gyur ba dam pa'i chos kyis phongs par 'gyur ba'i las byas ba'i phyir sgrib pa dang bcas pa zhes bya'o. rtag tu zhes bya ba ni rtag tu rgyun ma chad par ro. rtag tu yin yang la la bsam pa drag pos mi byed pas de yongs su spangs ba'i phyir gus par[19] byas te zhes bya bsmos so. bsags pa ni de rtogs par rung ba'i zhes bya ba ni bsod nams dang ye shes kyi tshogs bskal pa grangs med pa dang bos bsdus pa tsam gyi so. gzungs ba 'dzin par gyur ba la ni rnal 'byoir ' khrugs[20] pa zhes bya ba ni las dang po pa la gzung ba dang 'dzin pa'i dngos po sngar bshad pa'i tshul du bden par rnam par 'jog go. gang gi tshe thams cad du gzung ba dang 'dzin pa la gzhol par gyur na de ni rnal 'byor 'khrugs ba zhes bya'o. su'i ' khrugs she na rnal 'byor pa'i ste. rnam par mi rtog pa'i ye shes gzung ba dang 'dzin pa dang bral ba la gnyis su mngon par zhen pa'i phyir ro. bdag nyid mos pa la ni dge ba'i rtsa ba nyam chung ba 'o zhes bya ba ni dad pa dang ma chags pa la sogs pa dge ba'i rtsa ba dag yang dang yang du ma goms par gyur pa'o. nor pa'i mos pa'i bar du gcod pa ni bsam par mi bya ste. de nyid bar du gcod pa yin pas so. dkar po'i phyugs kyi mos pa kho na'i bar du gcod pa bsam par bya ba yin pas mngon sum pa ma yin pa'i bar du gcod pa yang bsam par mi bya ste. rang nyid bar du gcod pa'i ngo bo nyid yin pa'i phyir ro. [Pek.ed 154-4-1] zhi gnas tsam

gyis mngon pa'i nga rgyal byed pa'o zhes bya ba ni lhag mthong la mngon par brtson par mi byed pa ste. gang gi tshe gnas dang lhag mthong dag mnyam bar 'jug pa de'i tshe zung du 'brel pa'i lam thob pa'i phyir mos pa gegs med par 'gyur ro. ma bsgribs pa la ni sgrib pa'o zhes bya ba ni gang gi tshe le lo la sogs pa mi mthun pa'i phyogs dag gis don dan pa la 'brel pa'i bya bas gong nas gong du khyad par du [Der.ed 77a[1]] 'gro bar mi 'gyur ro. skyes pa da ltar byung ba'i ni bsod nams chen po'o zhes bya ba ni sngar mos pa skyes[21] pa ni 'das pa dang da ltar byung ba rnam pa gnyis su bshad do. de la da ltar byung ba'i phan yon ni bsod nams chen po yin no. 'das pa ni mngon par dga' ba la sogs pa'i mos pas yang dang yang du goms par byas pa la 'gyud pa med pa phan yon yin te. yid la gcags pa med pa phan you yin te. yid la gcags pa med pa'i phyir or. 'dzin pa dang gzung bar gyur pa'i ni yid bde ba chen po ste. ting 'dzin dang yang lngan pa'i phyir ro zhes bya ba ni gang gi tshe gzung ba dnag 'dzin par 'gyur ba'i mos pa de la mngon par zhen par mi byed kyi gzung ba dang 'dzing pa nyid rnam par 'jig par byed pa de' i tshe mngon par zhen pa bor bas ting nge 'dzin 'thob bo. rgya chen po'i ni gzhan gyi don thob pa' i mchog go zhes bya ba ni sangs rgyas nyid thob pa'o zhes bya ba'i tha tshig go. phan win ni mngon par shes pa myur ba nyid do zhes bya ba la mngon par shes pa myur ba nyid ni dbang po rnon po nyid de mgo smos bas go ba'i phyir chos myur du rab tu shes pa yin no. 'jig rten pa'i ting nge 'dzin dang ldan pa rnams kyi ni rus[22] sbal bzhin no zhes bya ba ni chos thamns cad kyi rang gi mtshan nyid dang spyi'i mtshan nyid khong du ma chud pa'i phyir mos pa 'khums pa zhes bya'o. yang na bsam gtan dang ting nge dang snyoms par 'jug pa thob pa tsam gyi phyir dang de tsam chog par 'dzin pa' i phyir dang de kho na nyid ma [Pek.ed 154-5-1] rtogs pa'i phyir dang won tan khyad par can ma thob pa'i phyir 'khums pa zhes bya'o. rang gi don dang ldan pa nyan thos rnams kyis ni gang zag la bdag med pa rtogs pa'i phyir chos thams cad spyi' i rnam par shes so. de gnyis kyi phyir de dag gi mos pa rus spal rta bu ni ma yin no. 'o na kyang rang gi don lhur len pa'i phyir 'khor bas skrag pas skye ste. bran bzhin du 'jigs shing skrag pa'i lus kyis rnam par rgyu bas de'i phyir bran[23] dang ' dra'o zhes bya'o. don de nyid gzhan gyis bstan nas zhes bya ba ni ji ltar khyi ni rtag tu ltogs shing sdug bsngal gyis nyen chog mi shes zhes bya ba'i tshigs su bcad pa 'di ni tshigs su bcad [Der.ed 77 b[1]] pa dang po las gzhan yin no. 'dis bstan nas de' i 'og tu gsum pas theg pa chen po la mos pa yang dag par len du 'jug pa yin te. theg pa chen po de la de mchog tshul bzhin rig nas ni 'di na bstan bas de la de nyid rtag par rab tu tshol zhes de skad du theg pa chen po la mos pa yang dag par len du ' jug go. bdag nyid za ba ma yin pa zhes bya ba ni rang gi don gyi dbang du byas nas zhes bya bar sbyar ro. re zhig gang zhig brtse[24] ba'i don dang rgyags pa dang cha ba la sogs pa'i don du za ba de'i zas de ni bsod nams ma yin pa kho nar 'gyur ro. gang zhig lung du ma bstan par za ba de'i zas de ni bsod nams kyang ma yin bsod nams ma yin pa yang ma yin no. gang zhig rgyags pa la sogs pa'i don du mi za'i 'o na kyang khol dgal ba'i don du shing rta'i srog shing skud pa lta bu'i tshul du lus 'tsho pas dge ba'i phyogs la rung par 'gyur zhing dge sbyong gi tshul du 'bras bu 'thob par ' gyur ro snyam snas lus 'tsho bar bya ba'i don du za ba'i zas de ni bsod nams su 'gyur gyi bsod nams 'byung ba chen po ni mi 'gyur ro. de zhin du nyan thos kyi theg pa'i chos la mos pa las kyang gzhan gyi don gyi rten theg pa chen po'i chos bstan pa tshigs su bcad pa [Pek.ed 155-1-1] gcig mnyan[25] pa dang bton[26] pa la sogs pa las phan yon ji skad du theg pa chen po'i mdo de dang de dag las 'byung da ci 'dra ba de[27] 'dra bar bsod nams ' byung ba chen po ma yin no. de ltar 'phags pa chen po'i chos ni yangs gyur la zhes bya ba la yangs par gyur pa ni theg pa chen po ste. mdo sde 'bum pa du ma bstan pa'i pyir ro. gang la dang gang zhig dang mos pa ji lta bus 'bras bu gang yongs su 'dzin pa zhes bya ba la gang la zhes bya ba ni theg pa chen po'i chos yangs pa la'o. gang zhig ces bya ba ni byang chub sems dpa' blo dang

ldan pa'o. mos pa ji lta bu zhes bya ba ni mos pa yongs su nyams par mi 'gyur ba rgya chen pos te. mos pa che zhes gang bshad pa yin no. 'bras bu gang yongs su 'dzin pa zhes bya ba ni bsod nams rgya chen po 'phel ba la sogs pa 'bras bu rnam pa gsum yongs su 'dzin pa'o.

【脚注】

1．拙稿「唯識説における「信」について」『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第24号所収。
ただし、「adhimukuti」の特質について特に注目したい業績に、近年では芳村博美氏の「信解（adhimukuti）の対象となる仏陀（Buddha）」（『日本仏教学会年報』第53号）があるが、「容認」の術語をもって「śraddhā」と対峙せしめ、問題視されたのは、袴谷憲昭氏の論文「如来蔵説と唯識説における信の構造」であったことはここに明記しておきたい。

2．Sylvain Lévi. Vijñaptimātratāsiddhi, deux traiés de Vasubandhu Vimsatikā et Triṁśikā (Paris,1925) p.25, 11.25-30

3．『成唯識論』大正蔵　31, p.26, c, 1.13参照。

4．Triṁśikā, p.25, 11.22-25

5．Triṁśikā, p.25, 11.19-20

6．『大乗荘厳経論』は、全21章（漢訳は24品）、約800頌から構成され、著作者についての伝承は蔵・漢両訳で異なっている。現存するテキストは以下の通りである。

A．Silvain Lévi, Asanga, Mahāyāna-sūtra-alaṁkāra, Exposé de la Dodtorine du Grand Véhicule selon le Systéme yogācāra, I-II (Tome I：Lévi.ed)

B．蔵訳、弥勒造『大乗荘厳経論と名づくる頌』
(Mahāyānasūtrālaṁkāra-nāma-kārikā：MSAK)
：Der.ed, No.4020〔Phi 1b[1]-39a[4]〕
：Pek.ed, No.5521（-nāma-：omitted）〔vol.108, pp.1-19〕

C．蔵訳、世親訳『経荘厳疏』
(Sūtrālaṁkāra-bhāsya：SABh)
：Der.ed, No.4026〔Phi 129b[1]-260a[7]〕
：Pek.ed, No.5527〔vol.108, pp56-117〕

D．蔵訳、安慧釈『経荘厳註疏』
(Sūtrālaṁkāra-vṛtti-bhāṣya：SAVBh)
：Der.ed, No.4034〔Mi 1B[1]-283a[7]〕〔Tsi1B[1]-266a[7]〕
：Ped.ed, No.5531〔vol.108 pp.199-327〕〔vol.109 pp.1-125〕

E．蔵訳、無性釈『大乗荘厳経論広註』
(Mahāyānasūtrālaṁkāra-tīkā：MAST)
：Der.ed, No.4029〔Bi 38b[6]-174a[7]〕
：Pek.ed, No.5530〔vol.108, pp.138-198〕

F．漢訳、波羅頗蜜多（唐代）訳出
『大乗荘厳経論』全13巻
：大正蔵31巻、No1604, pp.589-661
：縮冊蔵経　暑帙第4冊
：卍字蔵経　第21套第8冊
：国訳一切経　瑜伽部17

G．蔵訳、智吉祥（Jñānaśrībhadra：925年頃）
『経荘厳総義』（要約書）
(Sūtrālaṁkāra-piṇḍârtha)
：Pek.ed, No.5533〔vol.109pp.133-136〕

H．蔵訳、利他賢（Parahitabhadra）釈
『経荘厳初二頌解説』（部分註釈）
(Sūtrālaṁkārâdiśloka-dvaya-vyākhyāna)
：Pek.ed, No.5532〔vol.109, pp.127-133〕

7．SAVBh：Der.ed, No.4034, 148a[6]～148b[1]

8．Triṁśikā：p.25, 11.25-30

9．瑜伽行派において実践すべき学道とは、以下の3点を内容とする。

(1)何について学ぶのか。(所学処)
：yatra śikṣante
：gang la bslab par bya ba

(2)どのように学ぶのか。(如是学)
：yathā śikṣante
：ji ltar bslab par bya ba

(3)誰が学ぶのか。(能修学)
：ye śikṣante
：gang gis bslab par bya ba

そしてこれら学道は、『瑜伽論』の以下のuddāna（要約偈頌）に示されている。

svaparârthaś ca tattvârthaḥ prabhāvaḥ paripācane sattvasvabuddhadharmāṇāṁ parā bodhiś ca saptamī

(Unrai Wogihara, Bodhusattvabhūmi, A State-

ment of whole course of the Bodhisattva, Tokyo, 1971, p.22, 11.9-12)

自他利実義　威力熟有情
成熟自仏法　第七菩提処

(大正蔵30、p.428 c^{8-9})

つまり本文の「第７」とは次の５箇条７項目を意味していることがわかる。

①svaparârtha：(a)自利　(b)利他
②tattvârtha：(c)真実義
③prabhāva：(d)威力
④sattva-sva-buddha-dharmāṇāṁ paripācane：(e)成熟有情　(f)成熟自仏法
⑤parā-bodhi：(g)無上正等菩提

10. 『雑阿含経』第17参照。
11. Pek.ed, omit：la
12. Pek.ed, omit：ni
13. Pek.ed, mi
14. Pek.ed, omit：res 'ga' mos
15. Pek.ed, yang
16. Pek.ed, 'dres
17. Pek.ed, brel pas
18. Pek.ed, omit：ma
19. Pek.ed, pas
20. Pek.ed, 'khrag
21. Pek.ed, omit：skyes pa
22. Pek.ed, ru sbal
23. Pek.ed, dran dang
24. Pek.ed, rtse ba
25. Pek.ed, nyan pa
26. Pek.ed, ston pa
27. Pek.ed, omit：'dra ba de